分陀利華

第383号（令和２年10月13日(火)発行）
発行所
京都女子大学 宗教部
京都市東山区今熊野北日吉町35
電話 075（531）7074

たとへば牛より乳を出す、乳より酪を出す、酪より生蘇を出す、生蘇より熟蘇を出す、熟蘇より醍醐を出す。醍醐最上なり。もし服することあるものは、衆病みな除こる。
（『涅槃経』）

苦とともに歩む

現代社会学部准教授　藤井隆道

先日、知人が住んでいる地域の神社で、毎年恒例の神事が執り行われ、そこで「疫病退散」の祈祷が行われたという話を聞いた。その方は口にはしなかったが、仏教にそのようなものがないのかを聞きたかったのかもしれない。求められたときに「では、疫病によく効くお経をおつとめしましょう」とか、「皆さんで一緒に心をこめて祈れば、きっと疫病は消え去るはずです」と言えれば頼もしいのかもしれないが、私はそのような言葉を持っていない。仏教を学んできたなかで、こうすれば疫病を退散できるというような確かな教えに出会っていないのである。

新型コロナウイルスの感染拡大により、私たちはいま困難な状況に直面している。この状況をなんとか打開したいという多くの人の切実な願いに応えるために、神や仏に祈りを捧げる様々な行事が、全国の寺社で行われているという。そうしたことを聞いて、いま宗教がなしうることは何か、そしてまた仏教がなしうることは何かということについて、改めて考えさせられた。

＊　＊　＊

宗教的な営みを通して人は幸せを求める。これはごく当たり前のことのように思える。しかし宗教は幸せということと同じくらい、あるいはよりいっそう密接に、苦ということと結び付いてきた。

救済宗教の多くは「なぜ私がこのような目に遭わなければならないのか」という問いへの答え、つまり苦の成り立ちを説明するはたらきを持っている。たとえば、あらゆる出来事は神の意志に基づくとする立場では、苦難もまた神に与えられたものである。もしそうだとするなら、神に祈りを捧げることは理にかなった行為となるであろう。しかし周知の通り、仏教はこうした見方をとらない。苦は神が起こすものでもなければ、仏が起こすものでもない。

いかにして苦が生じるのかということに関して、仏教ではたとえば「惑業苦」の縁起が示されている。それによると、私たちの心が問題を抱えていて（惑　煩悩）、それに基づいて行動することから（業）、苦が生まれる。そこから仏教は、思い通りにならない苦の現実を引き受けて生きることを説く。すなわち、苦を自身の問題として受け止め、苦を通して自身のあり方を見つめ直すことから、苦を乗り越えて生きる道が開かれると説くのである。

＊　＊　＊

新型コロナウイルスの感染拡大は、私たちの日常を大きく変えた。多くの人が、様々な点で思い通りにならない現状に不満を覚え、また見通しのたたない未来に対して大きな不安を抱えて生活している。

しかし、こうした苦のただなかで、私たち自身、そして私たちの社会のあり方が、はっきり見えてきたということはないだろうか。いままでの当たり前の日常が、いかに脆弱な基礎のうえに成り立っていたのかということに、私たちは否応なく気づかされた。

感染者への過度の批判や誹謗中傷、あるいはマスクの争奪戦などといった大小さまざまなトラブルは、ウイルスそのものというより、私たちの心が生み出したものと感じられる。また経済活動と感染防止策をどのように両立させるか、あるいは限りある医療資源をいかに配分するかなどの問題をめぐる意見の対立の背景には、経済格差や地域・世代間の分断、あるいはさまざまな種類の差別意識などが透けてみえた。

社会が困難な局面にあるいまこそ、他者への共感や支え合いが求められている。しかし私たちのなかにある欲望や怒り、そして自己中心性が、多くの局面でそれを阻んでいることは否定できない。

もちろん明らかになったのは問題ばかりでない。自分にとって当たり前であったものが損なわれて、そのかけがえのない意義に気がついた人も多いと思う。「ソーシャル・ディスタンス」を強いられるなかで、自身が人とのつながりやふれあいのなかを生きていることを改めて実感した人もいるだろう。

私たちは思い通りにならない現実のただなかにある。しかしそのなかで、ほしいままに怒りやストレスをぶつけあったり、ただ自己中心的にふるまうのではなく、苦を通じて自分や社会のあり方をみつめることができるなら、自身の生きる姿勢や行いが変わってくるであろう。そのとき、苦が確かな意義を持つことになると思われる。

＊　＊　＊

ここで苦の意義ということについて、仏典の言葉に耳を傾けてみよう。七世紀後半のインドの学僧である寂天（シャーンティデーヴァ）は、苦によってこそ迷いの生を離れることができるのだから、苦を恐れてはならないと論じている。これは高邁な菩薩の精神だといえるが、それに続けて彼は、次のようにも述べている。

さらに苦には他の徳がある。それは厭患によって、憍りをなくさせることである。また輪廻する者に慈愍を、悪に対して懼れを、勝者（＝仏陀）に対して渇仰を生ぜしめる。（『入菩提道論』六・二一、金倉圓照訳『悟りへの道』七七頁）

苦の経験から、人は自分こそが優れているとする自己中心的な心を離れ、また他者の苦に向きあう態度や倫理性などが育まれるという。ここで寂天は、苦境が人を成長させるということを述べているのである。

苦は誰にとっても厭わしいものである。苦痛をじっと耐え忍ばなければならないとか、苦しみのなかでもポジティブであり続けるべきだとか、そのようなことを言いたいのでは決してない。もちろん、苦行を否定して誕生した釈尊の仏教で、ことさらに苦を受けるべきであるとは説かれない。苦は、煩悩をもって生きるうえで避けることのできない現実なのである。

しかしそれとともに、仏教は、苦を通じて私たちの生が実り豊かなものになりうるということもまた教えてくれている。思い通りにならない現実に向きあい、そこから前を向いて進もうとするとき、仏教の教えはきっと助けになることであろう。

大学若手職員からのメッセージ

⑤お互いに理解しあえる存在（相手）の大切さに気づく

２０２０年5月に新型コロナウイルス感染症対策専門家会議からの提言を踏まえ、「新しい生活様式」の実践例が示されていますが、私自身も含め、皆さまにおかれましてもこれまで当たり前に過ごしていた日常生活が一変されたかと思います。また、学生の皆さんにおかれましては、前期授業は原則対面授業を行わず、オンライン授業を行うこととなったため、先生や友人と直接会って話したりする機会がほとんどなかったのではないかと思います。

そのような中、かつて担当者として実施に関わった「全京都小学生お話コンクール」での表彰式において、ＮＨＫ京都放送局のアナウンサーの方が「聞いてもらう人にお話を理解してもらうには、どのようにお話をすればよいか」について触れられ、その答えとして「相手に聞いてもらいたいという気持ち」を強く持ち、「短いセンテンスで、普段の息づかいで伝える話し方」が大事である、また、話しの緩急と間が重要であるとの講評をされていたことを思い出しました。ＳＮＳやオンライン上でコミュニケーションをとる機会が多くなった昨今、相手に自分の思いを理解してもらうには、その気持ちを持って話すことが大事であると感じさせられました。同時に、相手の率直な気持ちや思いを感じ、理解するには、やはり直接会って細かな表情や感情を見て話さないと、それを汲み取ることが難しいと改めて感じました。

また、コミュニケーションを成立させるには、お互いに理解しあえる存在（相手）が不可欠です。私自身、京都女子大学の職員として奉職し17年目になりますが、これまで出逢った諸先輩方や同僚、そして同期や友人には、仕事や私生活等で悩んでいる時にいつも親身になって相談に乗ってもらい、励まされました。その「出逢い」には、今も本当に感謝しています。このコロナ禍において、直接会って何気ない会話をする機会は多くないかもしれませんが、皆さんにも友人や仲間といった存在と出逢い、かけがえのない関係性を築き、自分が悩んだり困ったりした時に、気軽に相談できる環境を作っていただきたいと思います。

今後、withコロナ、アフターコロナの時代を迎え、これまでに経験のない様々な課題や困難に直面することが予想されます。その時は、一人で抱え込んでしまうのではなく、お互いに理解しあえる存在（相手）と協力して、困難に立ち向かってください。そうすれば、必ずこの局面を乗り越えることができると信じています。

（進路・就職課係長　西山　岳夫）

澪標

親鸞聖人が文応元年（一二六〇）、乗信房に宛てた手紙には「去年・今年、老少男女おほくのひとびとの、死にあひて候ふらんことこそ、あはれに候へ。ただし生死無常のことわり、くはしく如来の説きおかせおはしまして候ふうへは、おどろきおぼしめすべからず候ふ」とあります。正元元年（一二五九）と文応元年には、全国で大飢饉と疫病が流行し、沢山の人が亡くなっています。親鸞聖人はその現実を「命あるものは必ず死ぬという無常の道理」と受け止められています。また『歎異抄』第九条には「いささか所労のこともあれば、死なんずるやらんとこころぼそくおぼゆることも煩悩の所為なり」と述べています。少しでも病気にかかると死ぬのではないかと心細くなるのは、煩悩の仕業であると仰っています。二つの言葉は、念仏の教えに出遇えたからこそ発せられたものです。

親鸞聖人は死に対する不安や疫病の流行に対しても実に冷静です。科学技術が進歩し、快適な生活を手に入れ、物質的豊かさを享受している私たちとは雲泥の差です。コロナ禍での私たちに行動には目を覆いたくなるようなものもありました。コロナ禍を契機に幸せに生きるとはどういうことかを考える機会としたいものです。

念仏の教えを生きる拠り所とした親鸞聖人は、疫病の流行や死を怖れながらも「命あるものは必ず死ぬという無常の道理」、また不安の根源を「煩悩の所為」として現実を受け入れていく強さを持っていたのです。（普）

心に残るひとこと

発達教育学部教授　田中　純

映画〈ボヘミアンラプソディー〉、最後の場面、舞台から超満員の客席を撮ったアングルの中での彼の歌を聴いて不覚にも静かに号泣してしまいました。私自身、客席の大小は様々ですが、幾度も経験してきたシチュエーションですので一瞬走馬灯の如く色々な思いが頭をよぎったのでしょう。

小学2年の時、純少年は初めてのピアノ発表会で大失敗をやらかしました。それ以来、元々気弱で小心者の彼は、毎年の発表会が近づいてくるとお腹が痛くなってきて人生？が嫌になっていました。一方、野球少年だった彼は、その不安を打ち消すべく毎日のように野球に没頭していました。ピアノを始めた頃は天才だ！と一部でうわさされていたのですが、この最初の失敗によりピアノはあまり好きではなかったようです。しかし、男の気持ちをわかってくださる先生は、彼を暖かく見守り、後に彼の歌の才能を見出し、歌のレッスンを始めました。その先生は、彼が小学6年になった時、大阪のフェスティバルホールに連れていき、生の素晴らしい音楽を聴かせ、「純、そろそろ本気になったらどうや？」

《無意味なことばでつづられた　千万言の詩よりも　こころしずまる一言が　はるかにとうとく美しい》〔法句経１０１〕

私は、前述のように小心者で物事に対して積極的ではありませんでした。今の私があるのは、これまでお世話になった恩師の折々のひとことのおかげだと確信しています。

将来の道を決めた少年は、声楽家でもあった音楽の先生がいらっしゃる高校に入学していました。本当は野球をしたかったのですが、丸坊主になるのがいやだったことと（今なら全く問題ないのに）、音楽の道を選んだ理由でコーラス部に所属しました。最初は、変声期が終わったばかりのか弱い声でみんなに紛れて歌っていました。3年生になる前に先生に呼ばれ、「純、指揮者になってくれ！」。人前で話すのが苦手な彼に指導なんてできるはずはありません。「指揮者になるなら、コーラス部を辞めます!!」と何度も断り続けた彼。しかし、先生は、許してくれませんでした。「純、お前しかいない！」翌年の合唱祭で指揮をした彼が、審査員に絶賛されたことを付け加えておきます。

東京の大学に合格した彼は、その大学で一番有名だった教授を希望したのですが、無名の彼は（当然ですが）、受け持ってもらえませんでした。しかしその教授が、声楽の試験の後、廊下ですれ違った時にすっと振り向いてひとこと、「歌、よかったよ」。そのひとことが、どれほど自信になり、彼の心にずっと残っていることか。数年後、その教授は、留学後の彼の歌を聴いた後にも、彼に賞賛の電話を突然かけたのでした。「……です。上手くなったね。」

大学卒業後、調子に乗った彼は、ドイツに渡ります。まだまだ未熟だった彼は、ドイツの音楽大学の教授に厳しく指導されます。やはり気弱な彼は、どんどん声が出なくなり、落ち込んでいきます。「こんなことでは、大変な思いをして僕を留学させてくれた両親に申し訳ない」と珍しく考え、別の音楽大学の教授のところに突然押しかけ、レッスンをお願いしたのです。彼の切羽詰まった必死の願いを受け入れてくれたその教授が、何度目かのレッスンの際のひとこと、「もっとおおらかに！」。細かいことに気を使いながら窮屈そうに歌っていた彼にとってどれほどの重みがあったか。単純な言葉だけれど、その場その場で影響力のある言葉は確かに存在します。その後の彼は、水を得た魚のように伸び伸びと歌うようになったのは言うまでもありません。ある時、その教授は「オペラのオーディションを受けてきなさい。」オペラが嫌いでオペラをする気がなかった実行力のない彼を半ば強制的に送り出し、合格させたのです。そのオペラ公演のため一ヶ月間、ドイツのある街で日本人1人外国人に混じって過ごしたのは、気弱な彼を少しだけ成長させたようです。

《戦いの場で　百万の敵にうち勝つ　人よりも自己にうち勝つ　その人が　まことに真の勝利者よ》〔法句経１０３〕

音楽は、戦いではありませんが、時々勘違いする人がいます。人より上手くなりたい。こう思うのは大間違いです。自分は自分でしかありません。独自の音楽表現をする以外ありません。その時に私のように弱い部分が多くある場合、それを克服つまり自己にうち勝つことが大切です。音楽の場合、勝利者ではなく、真の表現者と置き換えましょう。私の場合は、当然ですが一人で打ち勝つことはできないようです。恩師のひとことがあってこそ、その言葉に触発され、自身を見つめ、反省し少しだけ努力してこれまで生きてこられた気がします。

帰国後、純はあるオペラ作曲家と知り合い、また調子に乗ってオペラ出演を承諾します。何故、オペラ嫌いの彼が、承諾したかというと、ドイツのある演出家のひとことで、自分にもオペラができるかもしれないと思ったからです。「楽譜に忠実にそして言葉をしっかり感じて歌ってください。そうすれば自然に身体が動きます。」しかし、ドイツ音楽の研究と表現だけを探究してきた彼にとって日本語のそれも仏陀を演じるなんて無謀ですね。案の定、その作曲家に何度も指摘されました。「今、何、考えてた？」日本人なのに日本語で歌うことに慣れていなかった彼にとってやはりその時の歌は、言葉を伝える力がなかったのでしょう。このオペラの何度かの上演で彼の言葉を伝える力が増していったのは間違いありません。

ある演奏会で彼が、数々の童謡、合唱曲で高名な作曲家の前で歌う機会に恵まれました。その数日後、なんとその作曲家からＦＡＸで次々と歌曲が送られてきたのです。「作曲したので是非、歌ってください。」「僕のために曲を？」どれほど嬉しかったか。確か彼は、その時飛び上がって喜んでいました。その後、その作曲家と何度も共演をし、音楽家、表現者、そして人としての姿勢を多く学んだようです。ある時、その作曲家が彼に「田中君の歌は、優しいんだよね。」「いいえ、僕は優しくありません。自分のことしか考えていません。」「そう言えるのが、優しい証拠だよ。」

長い音楽人生、まだまだ多くの方々にお世話になりご指導いただきました。

最後になりましたが、京女にご縁があり、お世話になるようになってからの私の教員としての姿勢は、次の言葉に尽きます。

《他人に教える　そのように　みずからそれを行えば　自己をととのえ他人をもみちびく　まことに自己こそ御しがたい》〔法句経１５９〕

〈ボヘミアンラプソディー〉を観た折の涙の意味、少しは理解していただけたでしょうか。

法のことば

たとへば牛より乳を出す、乳より酪を出す、酪より生蘇を出す、生蘇より熟蘇を出す、熟蘇より醍醐を出す。醍醐最上なり。もし服することあるものは、衆病みな除こる。

（『涅槃経』）

今年の前半、コロナ禍による給食の停止で余ってしまった牛乳をたくさん消費するレシピとして、日本では古く飛鳥時代から食べられていた「蘇」が話題になりました。美味しくて栄養たっぷりと評判の蘇ですが、仏典の譬えには、この蘇を超えた究極の食べものが登場します。それが醍醐です。

牛乳を精製していくと酪→生蘇→熟蘇と変化し、最終的に醍醐ができます。この醍醐は最上の美味かつ万病を癒やす最高の薬とされ、仏法の中の最高の教えの代名詞になりました。浄土真宗では、阿弥陀仏の教えが醍醐に譬えられます。煩悩の病があまりに重く、他の仏法では救われない悪人が、完全なさとりを開くことのできる教え。これを親鸞聖人は「本願醍醐の妙薬」と表現しています。

（西　義人）

シリーズ　智慧の蔵㉝

『図解でわかる　ホモ・サピエンスの秘密』

インフォビジュアル研究所・著　太田出版　二〇一七年

皆さんは私たち人間について「特別な存在」だと感じたことはあるでしょうか？　確かに、他の生物に比べてあまりにも多様で複雑な社会を営み、繁栄をほしいままにして地球上に君臨しています。

地球が誕生して約46億年、最初の生命体が現れたのは、約38億年前。海中に生まれた単純な生命が、進化を重ねて陸に上がるまでに要した歳月は、実に30億年以上。それに比べて、サルとヒトが分かれ、最初の人類が登場したのは、ほんの７００～６００万年前。そして、私たちホモ・サピエンスの歴史はたったの20万年です。地球46億年の歴史を一年として換算すると20万年はわずか23分です。さらに、オリエントに文明が起こってから数千年ですから、加速度的に変化し続けています。何故、あらゆる生物のなかでホモ・サピエンスだけが、短時間で類まれなる進化の道を歩むことができたのでしょうか？

本書では『サピエンス全史　上下』（ユヴァル・ノア・ハラリ著）で示される、「認知革命」こそがその駆動力であると示されています。「認知革命」とは、想像の世界を言葉で語り、その虚構の物語を集団で共有する能力を持てるようになった、ホモ・サピエンスの脳だけが獲得した力です。その進化の歴史を紐解いてみると、狩猟採集生活から農業革命が起こった背景に虚構の物語としての宗教があったこと、暴力の避難場所として想像の共同体としての国家をつくったこと、そして、お金や株式会社、戦争までもがこの想像の産物だと言うのです。

私たち人類／ホモ・サピエンスとは、一体全体、何者なのか？　そして「幸せ」とは何か？　大学で学ぶ様々な事の大前提として、いま私たちが生きるこの世界の歴史とその秘密について、ぜひ知っておいていただきたい考え方です。図解で示されていることで、イメージを共有（まさにホモ・サピエンスに独自の能力である想像／イメージを活かした本！）しながら、この世界を俯瞰して眺めることができます。

さらに深く考えてみたい方には、ぜひ『サピエンス全史　上下』を手に取っていただくと、よりこの世界と人類の本質を知ることができると思います。

（竹本　了悟）

お知らせ

✻ 卒業回生の合同礼拝 ✻

卒業回生のみなさんは本学での最後の礼拝として「合同礼拝」を行います。

日　　時　令和２年11月18日（水）
15：00～16：30
場　　所　Ｂ501教室
記念講演　「宗教から世界を見る」
池上　彰 氏（ジャーナリスト）

・必ずお念珠を持参してください。
・参加者には卒業後にもずっと使っていただけるオリジナルの記念品があります。

✻ 仏前成人式 ✻

成人のお祝いに本学礼拝堂で仏前成人式を行います。記念講演では、英月氏にお越しいただきます。

日　　時　令和２年12月12日（土）13：00～
※12：10から受付を開始します。
※12：30までに入場してください。
場　　所　礼拝堂（Ａ校舎５階）・学生食堂（Ａ校舎地階）
記念講演　「あなたが、あなたのままで輝く～仏前成人式によせて～」
英月 氏（真宗佛光寺派長谷山北ノ院 大行寺 住職）

・先着100名です。　・必ずお念珠を持参してください。

◆申込などの詳細は京女ポータルまたは宗教教育センター（L校舎3階）までご確認ください。
※なお、今後の国内や本学の状況によりましては、開催が取り止めとなる場合があります。その場合は、京女ポータルにてお知らせします。